

双方向遠隔授業システムの活用による養成と研修の融合の試み

－ 教員養成課程の学生が若手教員の研修から学ぶ仕組みづくりを目指して－

* 前田 康二 * 中澤 隆志 ** 石井 宏典

MAEDA, Koji NAKAZAWA, Takashi ISHII, Hirofumi

* 奈良教育大学大学院教育学研究科教職開発専攻

School of Professional Development in Education, Nara University of Education

** 奈良県立教育研究所

Nara Prefectural Institute for Educational Research

1. 本報告の概要

本報告は、平成29年度に本学において双方向遠隔授業システムを活用して実施した、本学学生が小学校現場の若手教員の研修から授業づくり等について学ぶ取組みの概要の記録である。4回にわたり、本学と県内小学校を双方向のコミュニケーションが可能なテレビ会議でつなぎ、本学学生が、若手教員の授業及び授業後の研究協議等の視聴や、質疑応答などによる小学校教員との交流を通して、授業づくりや学校現場における授業研究の在り方、また教職全般について学ぶ機会をもった。参加学生へのアンケート及び関係者への聞き取りから、これらの取組みを通して、教員養成課程の学生が、年齢の近い採用2、3年目の教員が研修する姿に触れることで、近い将来の教員としての自分自身の姿が視覚化でき、教員になりたいという動機づけを高めることができる可能性が示唆された。

2. 対象とする取組み及びその背景

平成27年12月、中央教育審議会は『「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について」～学び合い、高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～』の答申の中で、学校教育を取り巻く環境が変化していることを認識することの重要性を指摘している。近年の学校現場では、大量退職、大量採用の影響により、以前のような日々の教育活動から学ぶといった先輩教員から若手教員への知識・技術の実践的な伝承がスムーズに図られていないことが指摘されている。奈良県の小学校教員の年齢構成を見てみると、20代が全体の23.6%を占め、今後この割合はさらに高くなっていくと考えられる。つまり、教えを請うべき経験の浅い教員よりも、それら

の教員を指導できる経験を有する教員の方が少ないという状況にある。このような状況において、先輩教員から若手教員への知識・技能の伝達が途切れず、継続的な研修体制が構築できるように環境整備を行うことは、早急に求められていることである。

さらに、前述の答申において「教員の養成・採用・研修を一体的に改革するのは今においてほかにはないと言える」とあり、教員のキャリアステージに応じ、教員のニーズも踏まえた研修を効果的・効率的に行う必要があるといえる。また、平成24年8月の中央教育審議会答申においても「教員になる前の教育は大学、教員になった後の研修は教育委員会という、断絶した役割分担から脱却し、教育委員会と大学との連携・協働により教職生活全体を通じた一体的な改革、学び続ける教員を支援する仕組みを構築する必要がある」とされている。こういったことから、大学等と教育委員会の連携の取組みが進められている。しかし、単に連携の必要性を強調しても、制度的な担保がなければ現実的には連携が進まないとの指摘もあり、具体的な制度的枠組みが必要である。

このような状況を踏まえ、奈良県では、平成27年度から、初任者研修、中堅教諭等資質向上研修との連続性を意識しながら、本学と奈良県教育委員会が協働し、採用2年目、3年目の若手教員の資質・能力の向上を目指して「小学校若手教員育成研修システム開発事業」を実施してきた。この事業は、平成27、28年度は、独立行政法人教員研修センター「教員研修モデルカリキュラム開発プログラム」において、奈良県教育委員会が同センターから委託を受けたものであり、「学び続ける教員」としての基盤をつくるために、県内5～6校の小学校を拠点校に指



図1 小学校若手教員育成研修システム
(奈良県立教育研究所作成)

定し①双方向型学習あるいは協働学習等を取り入れるなどして、子どもたちが主体的に意欲をもって学ぶ授業を構成する力（授業力）、②日常的・長期的な教育活動の中で、教員自らが協働して学び合う同僚性、③教員として学び続けていく向上心、を小学校若手教員自らが協働を通して身に付ける研修システム（以下「研修システム」という）の開発を行い、採用2年目教員を中心とした、経験年数の異なる若手教員同士が協働で研修を行う仕組みを新たに構築し、初期研修の機会等を通じて、県内全ての小学校2年目・3年目教員の資質・能力の向上を図ってきたものである。各拠点校における若手教員の研修には、年間を通して大学教員及び指導主事並びに当該校の管理職等がサポートチームを組んでサポートに当たっている（図1）。なお、事業の立ち上げ及び研修システムの開発については前田、小柳（2016）が、運用の課題と改善については前田、小柳（2017）が詳述している。

今年度は、2年間で開発した研修システムを継続的に運用しながら、これら現職教員研修の取組みを大学における教員養成の取組みにも活用することを通して、「養成と研修の融合」を図る試みを行った。具体的には、①就職支援プログラムと位置付け、双方向遠隔授業システムにより拠点校と大学とを結び、拠点校における授業及び研究協議等の様子を本学に中継し、学生がこの研修に参画することで、自らの将来の姿をイメージし、教員を目指す意欲をさらに高めることを目指すとともに、②この研修システムで県内全ての

小学校2年目・3年目教員が意見交流を行うネットコモンズのコミュニケーションシステムに本学教員が参画することで、県内の若手教員の実情を理解し、大学における授業実践を始めとする教員養成に役立てることを目指した。本報告はこのうち①の取組みの概要を報告するものである。

3. 実施の概要

就職支援プログラム「就職セミナー」と位置付け、本学全学生・院生を主な参加対象として開催した。平成29年度は10月～11月に計4回実施したが、各回それぞれ、全学に案内し、希望者を募った。実施に当たっては第1回を除く第2～4回は、双方向遠隔授業システムを活用して小学校（拠点校）と大学を結び、システムを通じて拠点校における授業や研究協議を本学学生が視聴し、事後に授業や協議を担当した小学校教員等と質問、感想や意見の交流を行う機会を設けた。また同時に、大学側で視聴している大学教員から授業者に対して助言を与える機会を設けることで研修の充実を図った。この取組みにおける養成と研修の融合の試みについて図式化したものが図2である。以下、4回の実施内容について述べる。

3.1. 第1回就職セミナー

日時：10月4日（水）14：00～15：10

場所：次世代教員養成センター2号館多目的ホール

参加学生：39名

就職セミナー第1回目として、奈良県立教育研

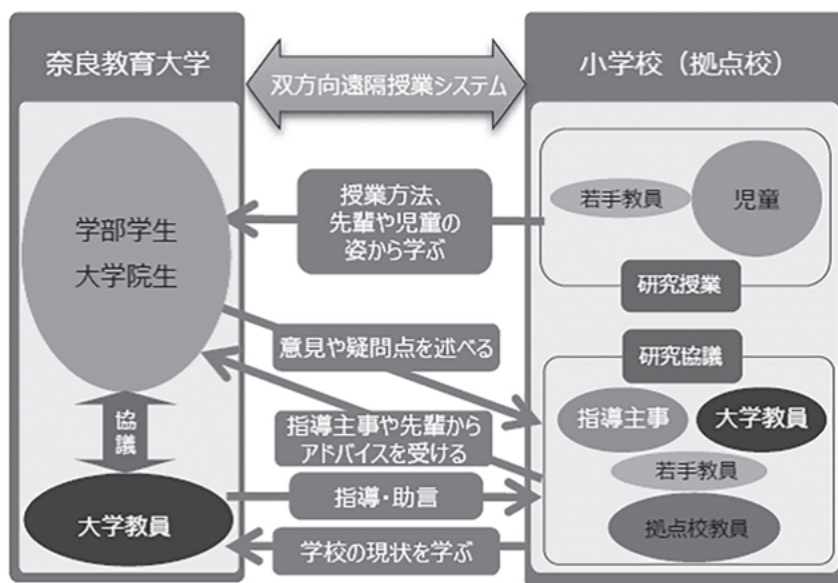


図2 「就職セミナー」における双方向遠隔授業システムの活用による養成と研修の融合の試み

研究所指導主事を講師として招き、参加学生に対して、「小学校の授業づくり（国語）のポイント」と題して新学習指導要領及び国語科の授業づくりのポイントについて講演をしていただいた。拠点校の一つで行われている若手教員の授業を例にあげ、映像等で紹介しながら解説いただき、授業づくりに加えて、拠点校において研修システムがどのように働き、それが若手教員の力量の向上にどのようにつながっているのかといった点についても紹介いただいた。

<参加学生の感想>

- ・授業づくりの面白さに気付くことができた。児童を観察し、どんな活動をさせれば意図する力が身に付くのか、児童がやりたいと自ら思える活動とは何か、実践例を知るだけでなく、組み立てる力を身に付けたい。
- ・国語科で目指している学びや授業づくりの方法を改めて教員の目線で見ることができ、教師になりたいという意欲が高まった。
- ・国語科の学習内容とその活かし方を学ぶことができた。講師先生のお話には感情が込められ表情豊かで、私もそのような高校教員を目指したい。

3. 2. 第2回就職セミナー

日時：10月18日（水）14：20～15：30

場所：次世代教員養成センター2号館多目的ホール及び講堂

中継内容：A小学校（拠点校）における研究授業後の研究協議

参加学生：次世代教員養成センター10名、講堂約250名

小学校における校内研修の進め方について学ぶことを目的に、若手教員が行った研究授業後の全教員による研究協議の様子を大学に中継した。学生は、各学校において授業研究が行われ、若手教員が他の教員にサポートしてもらっていることを目の当たりにすることで、自分たちも教員として赴任した際には授業力の向上に関わって同様のサポートが得られるであろうことを知ることができた。また、授業研究がどのように進められているのかを学ぶとともに、どのような観点で各教員が授業を観ているのかを学ぶ機会となった。研究協議を参観した後、質疑応答を行った。主に授業研究の進め方について、A小学校の研究主任に学生からの質問に答えていただいた。また、当日は、本学では、講堂で教育実習の事後指導が行われていたため、短時間ではあったが、A小学校の映像を次世代教員養成センター経由で講堂にも中継し、事後指導に出席していた学生全員がこれを視聴した。

3. 3. 第3回就職セミナー

日時：10月24日（火）13：45～15：55

場所：次世代教員養成センター2号館多目的ホール

中継内容：B小学校（拠点校）における研究授業
授業者：X教諭（本学卒業生、採用3年目）

学年、教科：第2学年、国語科

教材名：「どうぶつ園のじゅうい」光村図書第2学年上

本時の目標：本文の構成をまねて、係の紹介文の構成を考えることができる。

参加学生：21名

拠点校3年目教員であり、また、本学卒業生でもあるX教諭に2年生の国語の授業を公開していただいた。授業内容は、教科書の内容を手がかりに、自分の係の仕事での困った体験について考え、ワークシートにまとめ、同じ係でその内容を伝え合い交流を行うというものであった。

前時の振り返りを行った後、教科書を音読し、仕事の内容や進める手順やその工夫について想起させ、各自が自らの係の仕事で困ったときのことを考え、付箋にまとめていくという活動を行った。

まず、各自で係の仕事で困ったことについて「～でした。」という表現を用いながら付箋にまとめ、その内容をもとに、困ったときにどうしたのか、その結果どうなったかの2つの事柄について、同じ係の者で集まったグループ単位での話し合いが行われた。

児童への指示が明確であり、表現させる場合の注意点なども細かく説明されており、グループ活動の進め方等も含め、参加学生が参考とすべき点が多々ある授業であった。

授業後、参加学生と授業者との間で以下のような質疑応答が行われた。

<参加学生からの質問と授業者の応答>

(問) 2年生の子どもたちに分かりやすく授業をする際どのような工夫をしているか。

(答) ゆっくり丁寧に話すこと。教師がすべて説明するのではなく子どもたちに説明してもらう機会を作ることで子どもたち同士お互いの理解が深まると思う。

(問) 児童の理解を深めるために普段心がけていることは何か。

(答) 授業では、何もしない子がいないようにみんなが取り組める課題を設定している。普段は、できるだけ子どもと過ごす時間を確保し、子どもの話をしっかり聞くことや一人一人の個性を大切にしていきたいと考えている。

- (問) どのような意図で係活動を今回の授業で取り上げたのか。
- (答) 「書くこと」に重点を置いた授業を構成した。学校での係活動の様子を紹介文にまとめておうちの人に紹介することをゴールと設定した。
- (問) グループ活動が活発に行われていたが、普段の子どもたちの様子はどうか。
- (答) 普段からとても元気のあるクラスで素直な子どもたちが多く、授業でも活発に発言してくれる。

質疑応答の後、授業者から、これから教員になろうとする学生へ、以下のメッセージが送られた。

「教師という仕事は思った以上にやるべきことが多く、忙しくまた責任も重い職業ですが、思っていた以上に楽しく、やりがいのある職業だと思います。日曜日の夜は、また1週間始まるのかと気が重くなることもありますが、子どもたちと会うと元気も出て、子どもたちに力をもらいながら楽しく働くことができます。皆さんと一緒に働くことを楽しみにしているのでこれからも頑張ってください。」

セミナー後に参加学生から感想を聴取したところ、主に、2年生の子どもたちの様子や視覚的にわかりやすくなる工夫や教材で教えることの大切さ、グループ活動の進め方、机間指導の方法、明確な指示の方法等、多くの学びがあったとの感想が得られた。また、自分の3年後の姿を想像することができたとの感想もあり、参加学生にとって将来の自分の姿をイメージするだけでなく、教員になるために何が必要かを考えるきっかけになったと考えられる。

3. 4. 第4回就職セミナー

日時：11月24日(火) 13:45～14:55

場所：次世代教員養成センター2号館多目的ホール

中継内容：B小学校(拠点校)における研究授業

授業者：Y教諭(本学卒業生、採用2年目)

学年、教科：第1学年、国語科

教材名：「ことばをみつけよう」光村図書第1学年下

本時の目標：言葉遊びを通して、文字を組み合わせると意味のある言葉になることに気づくことができる。

参加学生：10名

拠点校2年目教員であり、また、本学卒業生でもあるY先生に1年生の国語の授業を公開していただいた。授業では、まず、教科書を音読し、「いる」と「ある」の使い方の違いについて確認し、各自が

教科書の例にならって問題作りを行った。ペアでそれぞれの問題について検討し、授業の後半にクラス全体で行うクイズ大会へ出題する問題の検討を行った。ペアで選別した問題を「いる」が使われるタイプの問題と、「ある」が使われるタイプの問題に分け、2色の画用紙に記入させていた。その後、授業の後半では、各ペアから出された問題を全員で考え、答えを見つけるとともに「いる」と「ある」の使い分けについても再度丁寧に指導されていた。

ペア学習の進め方だけでなく、ペアで問題を検討する際のホワイトボードの活用、選別した問題を書き込む2色の画用紙の使用等の教具の工夫も見られたため、参加した学生にとって学ぶべき点が多くある授業であった。

第3回同様今回も授業後に、授業を視聴した学生と授業者の間で質疑応答の時間をもった。

<参加学生からの質問と授業者の応答>

- (問) 「ふくろ」から文字を抜き出し「ふく」や「くろ」でなく「ふろ」と答えていた子どもがいたが、事前にどのようなルール説明をされたのか。
- (答) 子どもたちの多様な考えを引き出すためにもルールは最小限にとどめた。
- (問) ペア学習を取り入れておられたが、普段からペア活動をよく取り入れているか。
- (答) 1年生なので自分の考えを持つことを重点的に指導しているので普段はあまりペア活動を行わないが、今後互いの考えをしっかりと共有することも大切になることから今回はペア活動を取り入れた。
- (問) 低学年の子どもたちに授業をする場合、一番大切にしていることは何か。
- (答) 目を見て、子どもたちと向き合い、1対1で接する機会を増やし、子どもの話をしっかりと聞くことを心がけている。

質疑応答の後、Y教諭から参加学生へ以下のメッセージが送られた。

「教員になって多くの先生方との関わりの中から学ぶべき点が多に感じています。いろいろなアドバイスを受け自分なりに成長できていると思います。皆さんと一緒に働くことを楽しみにしています。」

参加学生からはセミナー後に以下の感想が寄せられた。感想から、児童主体の授業作りやその手法について、学生の学びが深まったと考えられる。

- ・児童が積極的に参加し全員に考えを発表する機会があり参考になる授業だった。
- ・声のかけ方、発問や板書の仕方等たくさんの事を

勉強できた。

- ・低学年への指示や言葉の選び方が参考になった。

4. アンケート結果及び今後の取組みへの示唆

「就職セミナー」に参加した学生に対して、第2回を除く各回にアンケート調査を実施した。以下に4つの質問項目についての結果を示す。

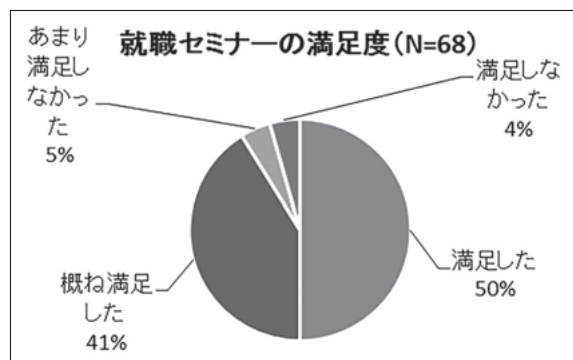


図3 就職セミナーの満足度

満足度についての問いは、第2回を除く各回のアンケートの質問項目に含めた。「満足した」「概ね満足した」の肯定的な回答が約9割を占め、この取組みが参加した学生にとっては満足できるものであったことがうかがえる。(図3)

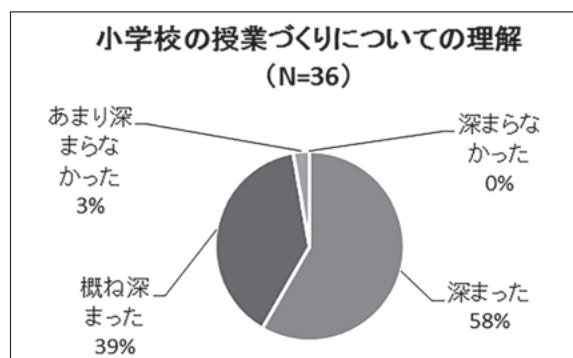


図4 小学校の授業づくりについての理解

図4は、第1回のセミナーにおける参加学生の回答である。第1回の主なねらいである小学校国語科の授業づくりへの理解についての自己評価を問うたものであるが、「深まった」「概ね深まった」の肯定的な回答が97%を占めており、指導主事による講義が有効であったことがうかがえる。3.1.に挙げた参加学生の感想も講義内容が具体的かつ的確であったことを示している。また、「私もその(指導主事)ような教員を目指したい」というコメントからは、当該学生にとっては、講義や講師の立ち居振る舞いそのものが授業づくりの手本となるものであったことがわかる。本事業においては、教員養成に携わる大学教員が、若手教員の研修の指導を行ったり、初任者研修や初期研修を始めとする教員研修に携わる

指導主事が本セミナーにおいて学生の学びを支援したりしている。アンケート結果からも、養成と研修への大学と教育委員会の「相互乗入れ」が「養成と研修の融合」を図ることに有効であることが考えられる。

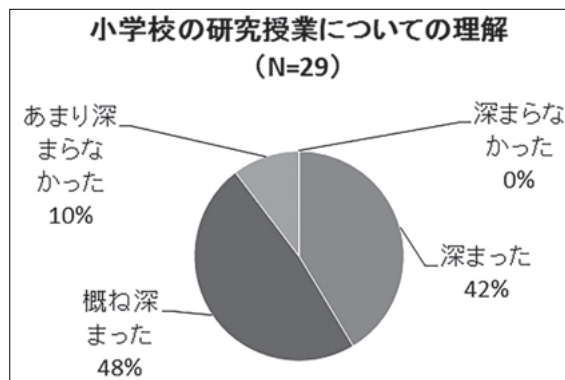


図5 小学校の研究授業についての理解

図5は、第3回、第4回のセミナーでの質問項目に対する回答である。「深まった」「概ね深まった」のが9割を占めている。参加学生はこのことに関わって、自由記述の回答で、教材教具の工夫や、学級のマネジメントなど、様々な学びを挙げている。一方、「あまり深まらなかった」「深まらなかった」の否定的な回答については、双方向遠隔授業システムの運用、特にカメラを教室後方に固定したため、児童の活動や板書等映像で十分に観察できないものが多かったことや指導の流れが分かりにくかったことが理由として考えられる。このことは、セミナー時にも参加者からもう少しカメラを動かしてほしいという希望があがっていたことや、自由記述にも、「板書のアップ画面や指導案があれば良かった」などの意見が出ていることなどからも推測でき、今後、カメラの位置取りやカメラワークの工夫、サブカメラの設置といったハード面での対応や、指導案の提示など、より詳細に授業観察できるよう改善が必要である。

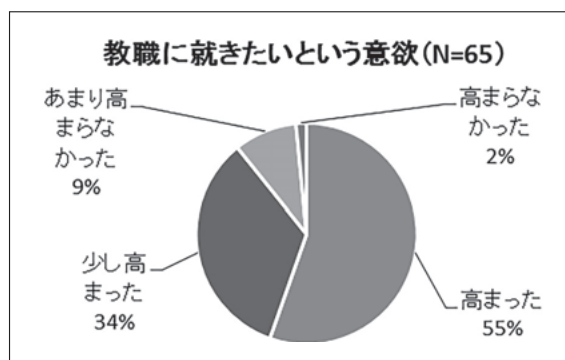


図6 教職に就きたいという意欲

図6の質問項目についても、第2回を除く各回で

問うている。約9割が「高まった」「少し高まった」と肯定的な回答をしており、このことは、学生が若手教員研修から学ぶ取組みが、学生の教職に就くという動機づけを高めるのに有効である可能性を示唆するものである。アンケートの自由記述には、「自分の3年後の姿を想像することができた」「2年後自分はこうなれるか?とイメージを膨らませることができた」「現場の先生の授業を見せていただくことで来年からのイメージを沸かすことができた」「身近な先輩が授業をする姿を見ることができ、私も努力することで、立派な授業ができるという勇気もらった」「若手の先生の姿を見て憧れとかっこよさを感じた」など同様の趣旨の記述がいくつも見られる。学生にとって年齢が近い教員が、様々な工夫をしながら頑張っている姿、学級担任として児童と信頼関係を築いている姿、キャリアは浅いけれどもプロの教員として立派に働いている姿を見ることが、その姿と重ね合わせて、近い将来教員として「なりたい自分自身の姿」を視覚化できるようになり、そのことが教職に就きたいという気持ちの高まりにつながっていることが考えられる。

次年度に向けて養成と研修の融合の取組みを進める中で、動機づけを高める要因や方法について明らかにしていくことが重要である。

次年度に向けて、この取組みを改善・充実するために必要な視点がいくつかあげられる。参加学生の自由記述からは、「月に1度くらい実施してほしい」「教育実習前にこのような機会を設けてほしい」「水曜日の実施がありがたい」「他の教科の授業からも学びたい」などがあげられている。

実施日程については、今年度の4回の実施についても授業と重なる時期、曜日については、当然ながら参加者が少なかった。今後は、水曜日の午後や授業期間以外などより多くの学生が参加しやすい実施を考慮する必要がある。また、教育実習の前後で設定し、教育実習での学生自身の学びと連動させるなどの工夫も有効であると考えられる。

他の教科等の授業については、道徳などの希望も複数あがっている。道徳については学校現場での研

修のニーズとも一致するところである。今後、養成と研修それぞれにおける必要性を精査しながら扱う教科等についても選択する必要がある。

本報告では、今年度手探りの中始めた取組みについてその実施及び結果の概要を述べた。次年度に向けては、今年度の成果と課題及びそれらを生み出す要因を明らかにしながら充実を図りたい。

5. 謝辞

事業が開始されて3年間、若手教員の育成及びその成果の教員養成への還元には様々な形で連携・協働していただいているすべての皆様に感謝申し上げます。

参考文献

- 前田康二, 小柳和喜雄 (2016). 学校・教育委員会・大学の連携・協働による小学校2年目教員の研修システムの開発－運営体制の構築と事業の立ち上げ期における運用評価を中心に－. 奈良教育大学次世代教員養成センター研究紀要第2号, pp.77-86.
- 前田康二, 小柳和喜雄 (2017). 学校・教育委員会・大学の協働による「学び続ける教員」の育成－小学校若手教員育成システム開発事業1年目の成果と課題から－. 奈良教育大学次世代教員養成センター研究紀要第3号, pp.89-97.
- 文部科学省中央教育審議会 (2012). 教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について (答申).
http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2012/08/30/1325094_1.pdf (参照日2018.1.20)
- 文部科学省中央教育審議会 (2015). これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い、高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～ (答申).
http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2016/01/13/1365896_01.pdf (参照日2018.1.20)